

# 『景德伝燈録』 訳文 (一)

鈴木 哲 雄

はしがき

ここ十年ほど大学院で『景德伝燈録』を回読している。巻六巻七を終わって、巻一四に移った。この回読では、禅独特のことばづかいや思惟方法を学ぶことに力を入れていく。巻六以下は馬祖及び馬祖門下の言葉である。途中から巻一四の石頭及び石頭門下に飛んだのは、禅文化研究所から入矢義高監修『景德伝燈録三』が出版されたからである。良書である。しかし、演習ではこのような親切な書があるとそれに頼ってしまい、実力を養成する目的を十分果たせなくなる。そこで石頭下に移ったわけである。

ここ二、三年参加者も増え、熱がこもってきた。教室は

『景德伝燈録』 訳文 (一) (鈴木)

緊張で漲っている。演習を終えたあとの満足感も多少感ずるようになった。社会生活を終え長年の念願であった大学院に入って禅の研究をはじめた伊藤光寿氏が、今年よりゼミに加わった。氏は回読のさまを忠実に筆録し、ワープロに入れてまとめてくれている。それを無にすることはもつたいないことで、更にゼミで検討を加え、修正してよりよいものとしていつている。このようなことになると、公のものとしてよいのではないかと思うようになった。語注や出典の探索など、まだ充分とはいえないものの、かなり深く検討してきている。これもワープロに入っている。禅の会話そのものはつっけんどんな感じて、飛躍も多く、どんな含みをもつ会話なのか、回読の中で追及もされている。

その内容もワープロに入っている。しかし、それらをも含めて全て公にするにはいまひとつ躊躇を感じる。それよりも会話をそのまま忠実に訳したら、かえって読まれる方の力量に合わせて、浅深いずれにも対応できるのではないかと思う。その方が堅さもとれて気楽に読めよう。それで本文の訳文のみを掲載することとした。いずれ語注、出典、読むポイントなどを指摘した総括的なものをまとめたとい期している。

景德伝燈録の内容は指導者と学人との会話のやりとりが中心となっている。わたしたちは漢文となっている本文を見ると、ひどくむずかしいと思ってしまう。でもことばのやりとりそのものは日常会話である。論書のような構築された思想の言語ではない。興趣を練り上げて表現した文学作品ではない。ではなぜむずかしいと感じるのだろうか。ひとつは会話文だからである。文章語とは違った文型であり、ちよつとした辞書には出てこない俗語がどしどし使われる。禅独特の毒舌をきかした野卑なことばも多い。文章語の漢文に慣れた人もちよつととまどってしまう。また禅の超論理的な論理といわれるような表現も多い。これも一

般的な思惟では追いつかない。また流行語的な語の入ることもある。流行語はその時に生きているもので、生命は短い。時代が過ぎるとどんなことを言ったものかわからなくなってしまう。更に会話は微妙な表現が多い。心象を言葉に出す時、微妙な言い回しとなる。こんなところにも文章語とは違った生きものであることを感じよう。

千年から千二百年以上も昔のことばではあるが、禅の会話は今に息づいている。禅にはじめて接する人は、奇妙な表現にひどく興味を持つか、意味不明、あるいは無意味として全く無視するかであろう。筆者は前者の立場から禅に手を染めることとなった。でも無視するにしても完全に無視抹殺しない限り、少しでもことばの残像があると、禅の持ち味である迫力をもって読んだ人を追いかけてくる。つまり読者に何らかの心にひっかかりを残すという力がある。それは禅の会話の迫力、あるいは魔力とでもいべきものである。実は読者の心に受け入れる素地があるというべきである。

禅を学ぶ人は、禅者の会話を追いかけて、その中にどつぷりとつかって理解度に満足し、その言葉に酔ってしまった

はいけない。落ち込みやすい落とし穴である。しかし、先学の血のにじむような修行の中の言葉は、禪を学ぶ絶好の指針である。禪を学ぼうとすれば無視することはできない。禪の語は観念的な語ではない。日常に生きながら生き生きとした禅的生活を志すには、それだけの実践がなければならぬ。蹉跎と向上の自分史に他ならない。禪は生きものである。自己の生きていくのと同歩である。だから浅深はある。同じ問答の理解にも理解度は種々あるし、理解そのものの違いもある。それは自身にとって、功夫くふうした年月の違い、辛酸をなめた生活による年齢の違いもあるだろうし、環境によっても違うだろう。柔軟性ある生き生きした若者と老いの迫った老人とは違うであろう。問答は概して短い。これは通常の会話にはない現象である。ところで一つの問答（会話）がそんなばらばらな理解を持つてよいものであろうか。そうではないはずである。必ずしっかりした何かを示しているはずである。それでなければ真に会話が成立したものとはいえない。たとえ禪はことばを超えているとはいっても、言葉を用いる以上、言葉の示す内容ははっきりしたものであるはずである。それでないと言葉は成立しな

『景德伝燈録』訳文（一）（鈴木）

い。「ああ」とか「やあ」とかいうに過ぎない。いや「ああ」「やあ」にもそれなりに示すところがある。それだけに問答の示す内容が重視されるのである。問答ではなくして、上堂語や示衆じしゅうのような修行者への禪の教えにおいても、このことについては同じである。禪の会話のもつ読者への広がりには、読者が現実に誠実に生き、現実の中で生きた言葉を考えている証左である。すなわち理解は読者に責任がついてくるのである。着語しゃくご（先人の語に後人がコメントした言葉）はなぜあるか、同時代の人においても、他者はなぜ問答に厳しい批判を投げかけるのか。それは問答の理解に関してである。そんなわけで理解に浅深があると述べたのである。

ここでは本文を忠実に現代語に置きかえるように努力し、内容の理解は読者にまかせるようにした。ゼミでの読み取りは一つの理解であろうから、今回は敢えて載せないことにした。原本は『大正新修大蔵経』卷五一の中の『景德伝燈録』である。原文と合わせて訳文をみてもうえば一層はつきりしようが、訳文だけでも問答の雰囲気はつかめるものと思う。景德伝燈録はいわば問答集ともいえる。禪の問

題集である。「千七百の公案」といわれるゆえんである。千七百とは千七百余人の人々の言葉を集めたからいうのであって、一問答あるいは一示衆を一公案と考えれば、実は何万という公案となる。読者には自ずと公案の取捨があるわけである。今回とりあげた中に一つでも関心のある問答があれば、訳した我々の幸いとするところである。

最後に今年（平成八年）四月から原稿締切の十月まで、回読に直接参加した人の名を記して謝意に代える。

花井充行、浅野法悦、嘉木揚凱朝、高山一法、宮下秀彦、松永善弘、朴鍵、伊藤光寿、鄭夙嬰各氏。

### 景德伝燈録第十五卷

青原行思せいげんぎし禅師ぜんしの第四世

前の澧州れいしゅうの竜潭りゅうたん崇信すうしん禅師ぜんしの法嗣はつす

朗州ろうしゅうの徳山とくさん（湖南省）の宣鑒せんかん禅師ぜんしは、四川しせん省けんなん劍南けんなんの出身

である。姓は周と言った。

あげまきの残る幼い頃に出家し、年齢（二十歳？）が来て、具足戒ぐそくかいを受けた。仏教教団の規則を集めた律蔵を詳しく研究し、法性宗ほっしょうしゅう、つまり華嚴宗けおんしゅうのような性宗と、法相宗ほっしょうしゅう（唯識）のような相宗の経典、即ち、仏教学全般の神髓えんそくを会得えとくされた。

常日頃、修行僧に、『金剛般若波羅蜜多經』を説き聞かせておいでになつていたから、同時代の人々から、「周金剛」と呼ばれていた。

その後、禅宗を極めたいと思ひ立つて、諸方を訪ねられた。

同じように、仏の道を求めている修行僧に、こんなことも言っていた。「吹けば飛ぶような」一本の毛が、全世界の海の水を飲み込んだとしても、毛の中の海水も、海水としての性質を完全に備えている。又、地上の小さな芥子粒けしつぶに、高い天から、鋭い針を投げても、その針先は芥子粒をピツタリと射抜き、微動みどうだにしないものである。阿羅漢あらかんに達してはいない修行中であるか、阿羅漢に達して底が抜けて、悟りに達しているかが分かるのは自分だけだ」と。

さて、竜潭和尚の許に至ったものの、問答は全て一語だけであった〔前章に既出〕。

徳山が、竜潭和尚の許を直ぐ去ろうとしたとき、竜潭和尚は、それを引き止めた。

ある夜、部屋の外で黙々と坐禅していたとき、竜潭和尚が、「そろそろ、戻って来ないかね」と声を掛けた。

徳山は、「真つ暗です」と答えた。

そこで、竜潭和尚は、手燭に火を点けて、徳山に渡そうとした。徳山が、それを受け取ろうとした時、竜潭和尚は、そこで火を吹き消した。

徳山は、師を礼拝した。

竜潭和尚は、「何が分かったんじゃ」と言われた。

徳山は、「私は、これから先、天下の和尚さまの言葉は決して疑いませぬ」と言った。

翌日になって、徳山は、師竜潭の許を発った。

竜潭和尚は、諸弟子に向かって言われた。「若しもだが、一人の男奴がいて、剣樹のような歯で噛み付き、真つ赤な血の滴りを入れた盆のような口でものを言い、一棒で打

ち据えても振り返ることすらしないとす。いつの日かきつと、その男奴は、誰一人取り付くことのできない鋭い峰の絶頂に、私の仏道を打ち立てるに違いない。(只者でないぞ)」と。

徳山は、瀉山(湖南省)にやってきた。

法堂の西よりよぎって、東に回って、方丈をじつと見た。瀉山靈祐和尚は、何も言われなかった。

徳山が、「ない、ない」と言って、そこで法堂を出て、僧堂の前まで来て、そして言った。「とはいうもの、いい加減ではいけない」と。

そこで徳山は、袈裟を着け威儀を正して、もう一度法堂に上り、瀉山和尚にまみえた。

徳山は、敷居を跨ぐやいなや、坐具を捧げ持って、「和尚様」と大声で呼び掛けた。

瀉山和尚が払子を取ろうとした時、徳山は、一喝して、袂を翻して出ていった。

瀉山和尚は、晩参の時、修行僧、即ち、大衆に尋ねられた。「今日新しく入った僧は何処にいるか」と。

大衆の一人が、「あの僧は、和尚さんにまみえたら、もう僧堂も振り返らず、さっさと出て行きました」と答えた。鴻山和尚が大衆に、「ところで、その和尚さんを識っているのか」と尋ねられた。

大衆は、「誰なのか知りません」と答えた。

鴻山和尚は、「あの和尚こそ、先々茅で頭を被って（小庵に住み一方の住持となつて）仏を罵り、祖師を罵つていくに違いないぞ」と言われた。

徳山は、三十年にわたつて澧陽（湖南省）に留まつた。

やがて、唐の武宗の会昌の破仏に遭遇し、独浮山の石室に避難した。

（破仏が終わつた）大中年間の初め（八四七年）のことである。武陵県の太守・薛廷望が、徳山に昔あつた修行道場を崇め尊び、（再興を願つて）改めて古徳禅院と呼んだ。

〔相国裴休が書いた額が現存する〕

廷望は、学徳のある、仏法に明るい高僧を尋ね求めて、古徳禅院の住持職に就いてほしいと願つた。廷望は徳山和尚の仏道修行の深さを耳ざとく聞き識つて、何度も懇請し

たが和尚は独浮山を下りなかつた。そこで、薛廷望は、一計を思つた。

廷望は、役人を遣わして、徳山和尚に茶と塩について嫌疑を掛けて、専売を定めた法律を犯したと言させた。役人が徳山和尚を捕らえ、武陵に連れて来た。薛廷望は、徳山和尚を仰ぎみて礼拝し、この武陵の徳山について、和尚の教えを大いに弘めるよう懇請した。

〔三角総印禅師が開山、創院一世であり、徳山宣鑒は、二世として古徳禅院に住した〕

徳山和尚は、法堂の須弥壇に上つて、大衆に言われた。

「自分が、本来の自己に立ち還つた安らかさという無事にあるならば、妄りに求めることはないものだ。妄りに求めて、得たと思つても、本当は何も得ていないものだ。お前達よ、ただ心において無事であり、事において無心であるならば、それは、虚空のように礙げのない、人智で測り知れない靈妙なのです。若しも、毛の先ほどの僅かでも、あれかこれかと分析的に、根本は、枝末はということをいえば、無事・無心の境地にある自分に背くことになる。毛

の先ほども、念想ねんそうに繫縛けいばくされるならば、それは、地獄・餓鬼・畜生の三悪趣あくしゆに墮おちる業ごうの原因となつてしまいます。ちらつとでも、心に動きが生じると、永遠に束縛そくばくという鎖に繋がれてしまいます。仏の御名も凡夫の名もどちらも、真実の声（名）ではない。勝すむれた姿や劣悪の形も、みな幻として作り出されたものでしかない。お前達よ、仏の御名を求めていけば、わざわざいなしで済むわけではない。そして凡夫の名を厭いとだというならば、これ又、大きな病気を生じるといふものだ。結局は、（そんな追い求める心は）何も利益りやくするところはないのです」と。

徳山和尚は、法堂ほつどうに上つて言われた。「今夜は、何も問い掛かけてくるな。問う者は三十棒だ」と。

その時、一人の僧が出て礼拝しようとした時、和尚はそこで彼を打った。

僧は、「私が未だ話もしていませんのに、和尚さまはどういう訳で私を打つのですか」と尋ねた。

徳山和尚は、「お前は、何処の人だ」と言われた。

僧は、「新羅しんらの者です」と答えた。

『景德伝燈録』訳文(一) (鈴木)

徳山和尚は、「お前が未だ新羅で船に乗らなかつた時に、三十棒を食くらわせておけばよかつた」と言われた。

〔法眼ほうげん文益ぶんえきは、「徳山ともあるう人が、楔くさびを打つた上に更に楔を打つような、抜き差しのならない語となつている」と言つた。〕  
玄覚げんかく、即ち報慈ほうじ行言ぎょうげんは、「禪宗では、これを「隔下の語」と言うが、それはそれとして、徳山が、問話もんわする者には三十棒だと言つた真意は、一体何だろう」と言つた。〕

ある僧が、（安居しようとして）やつてきた。

徳山和尚が（修行僧の生活指導をする）維那いのうに、「今日新しく来た僧は、何人か」と尋ねられた。

維那が、「八人です」と答えた。

徳山和尚は、「連れて来て、一度に強引にでも（生活の場となる単たんに）配置せよ」と言われた。

竜牙りゅうげが尋ねた。「私が、『鑊ばくの剣』によつて、和尚さんの頭を切り取ろうとしたら、どうでしょうかと」と。

徳山和尚は、頸を伸ばした。

〔法眼は、(自らの見解で、頸を伸ばすという動作のところに別に)別話して「お前は、どこを切るつもりか」と言葉を着けた〕

竜牙は、「頭が落ちました」と言った。

徳山和尚は、にっこりされた。

竜牙は、その後、洞山和尚の許に来て、この話を取り上げて申し上げた。

洞山和尚は、「徳山は、何と言ったか」と尋ねられた。

竜牙は、「徳山和尚は、何も言われませんでした」と答えた。

洞山和尚は、「言葉がなかったというな。そのことは今は措いて、徳山の落ちた頭を私に呈示しなさい」と言われた。

竜牙は、自分の間違いを反省して、お詫びをした。

ある人が、二人のやりとりを徳山和尚に話した。

徳山和尚は、「洞山和尚さんは、道理がはつきり分かっ

ていない。この男奴(竜牙)死んでからどれぐらいになるのか。仮に救い出すことができても、どこにこの男奴の働きどころがあるか。」と言われた。

僧が、「菩薩とは、どのようなものですか」と尋ねた。

徳山和尚は、その僧を打って、「出ていけ、ここに糞をたれるな」と叱られた。

僧が、「仏とは、何ですか」と尋ねた。

徳山和尚は、「インドの年老いた和尚さんが仏だ」と答えられた。

雪峯義存は、「代々伝えられてきた禅風を、和尚さまのところでは、どんな教え方で人に伝えますか」と尋ねた。

徳山和尚は、「私の宗旨には、言葉もなければ、人に与えるものなど一つもない」と言われた。

巖頭全豁は、この話を聞いて言った。「徳山和尚は、鉄のように背骨が一本通っており、捻つても折れない。とは言うものの、人を教えるということになると、いい線だがもう一息というところだ」と。



〔保福ほふく従展じゆてんは、この公案を取り上げて、招慶しやうけい（即ち長慶ちやうけい慧稜えりりやう）に尋ねられた。〕ところで、巖頭和尚いんとうわしやうが（住持として）指導的な立場に立たれてから、（師の）徳山和尚とくざんわしやうよりも、どんな（すぐれた）禅を説き示すことばや教えがあつて、このようなおっしゃり方をするのでしようか」と。

招慶しやうけいが言った。「お前さんは、巖頭和尚のおっしゃつたことは知っていますでしょう。〈弓を習っている人を例にとつていえば、長い間練習して、やっつ的に命中させられるのだ〉とおっしゃつたことを」と。

保福ほふくが言った。「命中したときは、どうでしょう」と。招慶しやうけいが言った。「従展和尚、痛みや痒みが分かつていないんじゃないですか」と。

保福ほふくが言った。「和尚さん、今日は、ただこの話を取り上げただけではないんです」と。

招慶しやうけいが言った。「従展和尚、一体なんの心算こころづもりなんだ」と。

〔後にこのことを聞いて、明昭みやうしやうが言った。「招慶とも

『景德伝燈録』 訳文（一）（鈴木）

あろう人が、取り間違えて、素晴らしい言葉を着けてしまったものだ」と。〕

徳山和尚は、平生へいぜい、修行僧がやつて来て、参じようとするのに会うと、大抵たいていは、（その新到僧しんとうそうを）拄杖しゆじやうで打つた。臨濟和尚りんざいは、このような徳山の遣り口やぐちを聞いていたので、侍者じしやに命じてそこに参禅させようとした。

臨濟和尚は、徳山和尚が若しお前を打とうとしたら、ただその拄杖を受け止めて、和尚の胸に拄杖を当てなさい、と教えさせた。

侍者は、徳山和尚の許もとに行き、礼拝らいはいしようとした。徳山和尚はそこで打つた。侍者は、（言われていたように）拄杖を受け止めて、徳山和尚に一拄を与えた。

徳山和尚は、方丈に帰られた。

侍者は戻つて、（事の成り行きを、）師臨濟に報告した。

臨濟和尚は、「前から、この男は只者ただものではないと疑つていた」と言われた。

〔巖頭いんとうが言った。「徳山和尚は、平生、目の前にある一本の拄杖を使つて、仏が来ても打ち、祖師が来ても打

った。何一つとつかかりもなく、どうしようもない」と。

〔東禅齊、即ち雲居道齊が言った。〕「ところで臨濟禪師が、『私は、前からこの男を疑っていた』と言ったのは、これは肯定の言葉なのか、肯定しない言葉なのか。それとも別に道理があつてのことなのか。一度このことをきちつとさばいてみなさい」と。』

徳山和尚が、法堂はつどうに上つて言われた。「問い掛ければ、それだけで落ち度がある。(逆に) 問い掛けなければ、(学ぼうとすることに) 背くことになる」と。

ある僧が進み出て、(徳山和尚を) 礼拝した。

和尚は、そこでその僧を打った。

僧は、「私は、和尚様を礼拝しはじめたところなのに、どうして打たれるのですか」と尋ねた。

和尚は、「お前が口を開くのを待っていて、何の役に立つというのか」と言われた。

徳山和尚は、侍者に義存を呼ばせた。

〔義存とは、雪峯義存のことである〕

義存が、方丈にやってきた。

徳山和尚は、「私は、自分で義存(という名)を呼んだのに、お前がやって来て、どうするのか」と言われた。

義存は、答える言葉もなかった。

徳山和尚は、僧がくるのを見て、そこで門を閉じられた。その僧は、門をたたいた。

徳山和尚は、「どなたか」と尋ねられた。

僧は、「師子(ライオンのように勝れた者)です」と応えた。

徳山和尚は、そこで門を開けられた。

僧は、和尚を礼拝した。

徳山和尚は、僧のうなじに馬乗りになって、「この畜生め、どこを(ふらふらと)行ったり来たりしていたのか」と言われた。

雪峯が尋ねた。「昔の禅僧が猫を斬ったが、言いたかったことは何でしょうか」と。

徳山和尚は、追い掛けて行って、雪峯と呼んで、「分かったか」と尋ねられた。

雪峯は、「分かりません」と答えた。

和尚は、「私は、このように、慈心の極みで教導しているのに、分からないのか」と言われた。

僧が、「凡人と聖人とは、どれくらい離れているのでしょうか」と尋ねた。

和尚は、そこで大声で怒鳴った。

徳山和尚が病気になる時、ある僧が尋ねた。「いったい、病気になる人がいますか」と。

和尚は、「いる」と答えられた。

僧は、「病気になる人は、どういう人ですか」と尋ねた。

和尚は、「ああ、ああ」と苦しげに言われた。

徳山和尚はもう一度多くの弟子たちに告げて言われた。

「〈空を〉まさぐり、音のする方に追いかけていくように、

『景德伝燈録』 訳文(一) (鈴木)

(種々の) ものの痕跡を追いかけていくならば、お前たちの精神を疲労させるだけである。夢から醒めると、そうではなく単なる夢だったのだとわかるように、つまるところ、ああこうするとうようなことは何もないのだ」と言いおわると、安らかに坐して、遷化せんげされた。

すなわち、唐の咸通六年乙酉かんつうの十二月三日のことであった。世寿八十六年、法臘六十五歳であった。勅命により、見性大師と諡おくりなした。

洪州泐潭宝峯和尚

ある僧が、始めてやってきた。

宝峯和尚が、「究極のこのことは言いやすいが、究極のこのことにはまり込まないことは、最初から最後まで全て表現し難い」と言われた。

僧は、「私も、遊方ゆほうの途中で、今言われたこの一問の大  
事なことに気付いていました」と言った。

師は、「更に二十年行脚あんぎゃをして参禅聞法さんぜんもんぽうをしても、たいしてちがうまい」と言われた。

僧は、「和尚様の意にかな適わないのではないでしょうね」と尋ねた。

師は、「にがうり苦瓜で、客をもてなすことができずか」と答えられた。

宝峯和尚が僧に尋ねられた。「昔の禅僧は、一本のしっかりした道筋をもつて、後輩や初学者を指導している。貴僧は、このことを知っていますか」と。

僧は、「師にお願ひします。昔の禅僧の一本のしっかりした道筋をお示しく下さい」と言った。

師は、「そうであるなら、貴僧はもう既に知っていますか」と言われた。

僧は、「頭の上に更に頭を置くというもので、丁寧もいところですか」と言った。

師は、「私、宝峯は、ひとさまに尋ねるべきではありませんでした」と言われた。

僧は、「尋ねることに不都合はありません。どうぞ質問してください」と言った。

師は、「ここ(宝峯院)では、今まで、理屈を捏ね回し

て喋り散らす人は一人もいなかった。出て行きなさい」と言われた。

前吉州性空禅師の法嗣

歙州茂源和尚

平田普岸がやってきた。

茂源和尚は、身を起こして立とうとされた。

平田は、そこで師を、ぴたりと押さえ込んで言った。

「口を開いたらそのものをなくします。口を閉じたままなら自分のものでなくなりません。この語黙二途を取り除いた自在な境地を、お示しく下さい」と。

師は、手で耳を掩うだけであった。

平田は、手を放して言った。「一步は易しいが、二歩は難しい」と。

師は、「どうしてそんなにムキになるのか」と言われた。

平田は、「若し、この師でなければ、いろいろな方面の禅僧から、力量を吟味されることは必定だ」と言った。

棗山光仁禪師

光仁和尙が、法堂に上がられる時、大衆が集まった。

和尙は、方丈を出て、法堂の住持の禪椅につかないうちに、(もう)大衆に言われた。「日ごろの仏道実践の要点を外さないで、質問をしようと思ってきているものがあるか」と。

そこで、はじめて法堂に昇って、住持の禪椅に着かれた。その時、ある僧が進み出て、和尙を礼拝した。

師は、「自己に背かなくて、しかも大衆と一如するとうことは、どうなんだ」と言われた。

そして和尙は、方丈に帰られた。

翌日、別のある僧が、「昨日の和尙様のお言葉の真意は何であったか、教えて下さい」と申し出た。

師は、「昼の食事に、御飯が出て、お前たちと一緒に食べる。夜もふければ、寢床があつて、お前たちと一緒に眠

『景德伝燈録』訳文(一)(鈴木)

る。ひたむきに、鍋で煎るような焦燥にかられる死がせめつけてくると、自分はどうするか」と言われた。

その僧は、和尙を礼拝した。

師は、「やれやれやりきれん」と言われた。

僧は、「お願いですから、ピタツとお示し下さい」と言

った。師は、そこで、足を垂らして言われた。「足を伸ばすか、足を縮めるかは、私に任せなさい」と。